The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	社会学的想像力とアナロジー
Author(s)	厚東, 洋輔
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1984, 10, p. 1-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11077
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

社会学的想像力とアナロジー

厚　東　洋　輔

社会学的想像力とアナロジー

第1節　社会認識の2つの主題

何を目標に人々は，「社会認識」という厄介な課題に取組んでいるのだろうか。自分達が生きている社会を総体として認識したい，これが社会認識の窮極目標である。直ちに念頭に浮ぶのはこのような答えであろう。私達の生きている社会は，一つの全体として把えられた場合，どのような種別的特性をもっているのか，そしてまた社会は，全体として，どこからどこへ行こうとしているのか――こうした問いかけに苛まれずに社会認識に携わるようになる者は多分ごく少数であろう。社会認識を嚮導する第一主題は，「全体社会の構造と変動の解明」である。

このようなマクロ的関心のみによって社会認識は支えられているのだろうか。社会の全体的的把握，という主題ほど自明ではないが，社会認識には，実は今一つかくされた主題がある。C. W. ミルズは次のように言う。

「全ての古典的社会科学者は，時代の顕著な特質に，またその時代に歴史がどのように作られているかという問題に関心を注いできた。〔と同時に〕彼の関心は『人間の性質』――その時代に支配的となっている人間類型――に注がれていた[1)]。」

私達が「社会」に出会うのは，具体的にいえば，自分と生を共にする他者という姿を通してである。社会認識においては，認識対象としての社会の具体相である他者も，認識主体である私も同じ「人間」である。他者を，ひとたび私と同じように生まれ暮し死んでいく人間と見なすと，他者はもはや社会を構成する一要素といった規定で括り切ることはできなくなる。他者は，私自身が私にとってそうであるように，かけがえのない存在となる。他者は，認識上の全ての関心を吸引してもしたりない魅力的な認識対象となる。社会は，今や認識の舞台の前面から，人間を理解するための背景へと退く。最高の認識目標は，社会ではなく人間ということになる。

「社会学者とは，人間の営みに対して徹底的に恥じらうことも倦むこともなく，強烈に関心を抱く人間である。……彼は人間に関心をもつが故に，人間のなす事のどれ一つとして彼にとって退屈なものはない[2)]。」

具体的な個々の人間に対するこうした生々しい関心は，「社会学者」ばかりではなく社会の認識者達が等しく抱くものであろう。その限りで「人間の行為と動機の理解」は，社会認識

を嚮導する第二主題といえるだろう。

社会認識は，全体社会の把握と人間の理解という2つの主題によって形作られている。社会認識の主題のこうした二重性に着目してはじめて，「社会科学」がかつては「道徳科学」あるいは「道徳哲学」とよばれていたのは何故かを十分に了解することができる[3]。モラルは，全体社会と人間を媒介する結節点として社会認識の中心へと押し出されたのである[4]。

「社会学」もまた社会認識を志す限り，全体社会と人間という二つの主題から離れるわけにはいかない。例えば，G．ジンメルは「個人と社会」問題に社会学の根本問題を見い出し，またミルズは「社会学的想像力」を「私達自身の身近な現実を，全体の社会的現実とのつながりのなかで理解することを，最も劇的に約束する精神の資質」に求めざるをえなかった[5]。社会学とは何かについて，一定の抽象水準で答えようとすると，時代・文化的環境・個人的資質の如何にかかわらず，社会認識の二つの主題を打出ざるをえない。というのも社会学という専門分野は，社会認識という豊かな大河から分れ出た，一つの支流にすぎないからである。

社会認識の二つの主題の間には自然調和が約束されているわけではない。むしろ逆の事態が通常である。「人間」理解を第二主題として伴うことによって，第一主題の「全体社会」の認識はある固有の難問に直面する。この困難は，人間と全体社会とでは認識者に与えられる様態が全く異なることに由来する。「人間」は具体性に充満し生き生きとした現前性を身にまとった存在として私達に与えられる。それは認識者が実際に目で見，手で触れることのできる可感的対象である。それに対し「全体社会」は，こうした具体的個人から構成される二次的な構成物として私達に与えられる。その現実性は直接実感できず，論理の力によってその存在を推定しうるような観念的存在である。つまり全体社会とは，可視性・可感性・現前性を喪失した社会のことである。

こうした全体社会に対する見方は，しばしば「原子論の体系」とよばれるが，この比喩は正確ではない。自然認識における原子論は，私達が日頃目にする物質の多様な存在形態を，その属性が一義的で判明な窮極的要素を仮設することにより統一的に説明しようとする試みである。探求の端緒である「物質」は具体的な実在で，その属性は一つの全体として――その限りで複合的・多義的・曖昧なものとして――私達に与えられている。それに対し原子は，その実在が理論的に想定されている抽象的・仮設的構成体であり，またそうであるが故にその属性は一義的で判明である。社会認識における原子論の体系にとっては，事態は全く逆である。部分である原子の方が具体的な存在で，抽象的なのは（全体である）全体社会の方である。同じ「原子」といっても社会認識における「個人」は，その実在性・具体性に関する限り，自然認識の場合と全く異なる。このように事態を過度に単純化しておくと[6]社会認識における全体性認識に特有な困難の所在が判明となる。

「全体」とは，定義により，無限の複雑性を内包している。このような全体を，有限な認識能力でもっていかにして把握することができるのか。全体の認識に首尾よく成功するケースとして，次の二つの仕方が考えられよう。まず全体が探求の端緒ですでに与えられている場合。全体はイメージないし直観という形で，認識者の主観のなかで生き生きと実感されている。少なくとも認識者にとっては現前しているこの生きた全体を，もっと明晰・判明に把握するために，一連の方法的な認識活動が発動される。全体のなかに「部分」ないし単純な諸「規定」が想定される。部分どうしの相関性が仮設され，全体は言葉の網の目によってからめとられる。こうしたことが可能なのも，全体が具体性に満ち満ち，抽象的なのが部分の方だからである。このような条件は，社会認識における原子論の体系には欠けている。それ故，全体を事前に念頭に浮べることが必須不可欠なこうした接近方法は，2つの主題を同時に追求しなくてはならない社会認識には閉ざされている。

全体はイメージされることができなくとも，その属性が一つ一つ調べられることによって，論理的に構成されることも可能である。例えば連立方程式群で表現された「全体」を考えてみよう。その全体を実感したりイメージすることはできないが，方程式が一本の場合の変数のとりうる範囲と，方程式が連立された場合のそれとを比較すれば，全体が実在することは論証できるだろう。この場合の「全体」とは，構成単位（ユニット）の属性には還元しえない創発的属性の担い手として想定されるもののことである。全体は創発的属性の集合として探求の結果，構成される。このような全体を，今仮り「システム論的」全体とよべば，こうした接近方法が成功するには，単位のもつ属性が一義的で判明であることが必須不可欠である。というのは，創発的属性は，単位の属性には還元しえないような特性として，消極的な形でしか定義できないからである。社会認識の場合人間は，属性が判明な構成単位という地位に甘んじてはいない。人間は具体的存在として把握されている限り，多義的で曖昧な実在である。人間は単位ではなく全体として取扱われることを要求する。人間理解を第二主題として追求するのを断念しない限り，システム論的全体として社会を把握する途は，社会認識には閉ざされている。

社会認識は，2つの主題をもつ限り，全体を実感する途も，また全体を単位から構成する途も，いずれもとることはできない。社会認識においては全体性への回路は全く閉ざされているようにみえる。社会の全体認識は，このような閉塞状況故に断念されてしまうのだろうか。決してそうではない。全体性へのパトスを根絶することはできない。ここで社会認識は最大の難問に逢着する。パトスだけでは認識への途を開くことはできない。パトスを現実化するロゴスがなくてはならない。では一体，社会の全体認識はいかにして可能なのだろうか。

第2節　社会学的想像力の構造

2—I　イメージの構成

人間理解を第二主題に従えつつ，社会を全体として把握するという社会認識の第一主題はどのような手立によって現実化されうるのか。少なくとも社会認識のこれまでの歩みを顧みて考える限り，次のように答えることができるだろう。全体社会は，アナロジーの論理を駆使することによって，認識され続けてきたと。全体を一望の下に見渡せ・生き生きと実感できるようなある対象を選び出し，それを「社会」に見立て，その特性を吟味することを通して，社会の全体認識に到達しようと試み続けられてきたのである。全体社会に見立てられ，アナロジーの餌食にされるようなある対象を，ここでは，＜アナログ＞ Analogue ないし＜類同代理物＞とよぶことにしよう。社会認識は，このような＜アナログ＞を駆使することによって全体性に達しようと試みるのだが，仔細にみると，＜アナログ＞は実は2つの仕方で用いられている。＜アナログ＞の果す2つの機能のおかげで，社会の全体認識は我がものにされるのである。

まず第1に＜アナログ＞は，私達に全体社会の「イメージ」を構成することを可能にする。対象をイメージとして構成する私達の能力とは「想像力」のことだから，＜アナログ＞がまず私達に与えてくれるのは「社会学的想像力」であるといえよう。

ところで，イメージとは一体何か，社会認識において，イメージとして対象を意識すること，想像力を我ものにすることが，何故にそれ程までに重要なのか？今や古典的ともいえるサルトルの「イメージ」についての定義から議論を出発させることにしよう。

「像 image とはそれ自体としてではなく，めざされた対象の『類同的代理者』représentant analogique の資格においてあたえられる物質的，あるいは心的内容を通して，不在あるいは非存在の対象を，その具体性の裡においてめざす作用であると定義され」よう[7]。

サルトルの定義で注目すべき第1点は，イメージを構成するためには，私（想像的意識）とめざされる対象（像的対象（イマージュ））の間に介在する「あるもの」が必須不可欠であると指摘されている点である。彼はこの介在者を「それ自体としてではなく，めざされた対象の類同的代理者の資格においてあたえられる物質的，あるいは心的内容」と特徴づけ，「アナロゴン」Analogon と名づけている。アナロゴンはめざされる対象と，何らかの意味で類似しているが故に想像力が発動される機縁となりうるのだが，あるものが「類似的」と認定される根拠についてサルトルは必ずしも明晰ではない。サルトルにとってアナロゴンは，一方で「想像力行使のための純粋な触媒」，「単に純粋な機会因」にすぎなく，他方でそれは「思考の構成

的対象と何ほどかの類似を帯びたものとして通用」させられている[8]。彼の強調点は，想像的意識の自発性のテーゼに照応して「機会因」の方におかれている。しかし社会認識の場合＜類同代理物＞が選ばれる根拠はアナロジーなのだから，何らかの対応の規則が抽出可能な「類似性」が前提とされ，また強調されている。サルトルのアナロゴンに「類似という魂を吹きこんだ」もの，それがここでいわれている＜アナログ＞である。

＜アナログ＞を介在させることによって，私達がめざすのは「不在あるいは非在の対象」である。これがサルトルの定義で注意すべき第2点である。私達がイメージを構成する対象は，あくまでも非現実の性格を印されている「想像界の対象」である。逆に「不在あるいは非在の対象」を念頭に浮べようとするとき，私達は想像力に訴えざるをえない。「全体社会」は「不在あるいは非在の対象」という特徴づけにまさにぴったりである。ここに社会認識において想像力が発動されなければならない根拠がある。全体社会が，イメージとして構成されうるのは，＜アナログ＞のおかげである。＜アナログ＞のめざす対象は「想像的なもの」であるが，＜アナログ＞そのものはあくまでも現実的なものである。＜アナログ＞が「不在あるいは非在の対象」であるのではない。この点を銘記しておくことは行論上重要である。

イメージの作用により「想像界の対象」になった事物は，現実的な実在と全く異った仕方で私達に与えられる。サルトルは想像的対象に独特な与えられ方の様態を「現前化」と名づける。イメージによってめざされる対象は，あたかもそれを私達が占有できるような仕方で，私達の面前に忽然と姿をあらわす。面前にあるその対象を私達は「見る」ことができる。それはあくまでも「不在あるいは非在の対象」なのだから，正確にいえば，「見えるように思われる」のである。それは「存在」するのではない。存在するのは，それが存在するという私達の「信憑」である。「見る」というより「憑り移る」ために，ある対象を自分の面前に喚起したいと思うとき，私達は想像力に訴えかける。想像的対象は，息苦しいまでに生々しい存在「感」をそなえている。

パンテオンのイメージを描くとき，パンテオンが存在するという信憑を疑うことはできないが，パンテオン=イメージの柱を1本2本と指折り数えることは決してできない。想像的対象は，そのあらゆる属性や側面など一切合財を含みこんだ細分されえない全一体(マッス)として与えられる。「〔想〕像的対象は，全体的な相の下に『現前化』されている」[9]。イメージを構成するとは，対象を分化されない全体として意識することに他ならない。この全体性は決して抽象的なものではない。それはあくまでも「具体性の裡において」[7]与えられている。以上を要するに，現前化とは，ある対象を全体的—具体的相の下で私達が表象に浮べることのできる状態であるといえよう。

イメージの作用についてのこれまでの議論で，何故に社会認識において想像力が必須不可欠であるかはもはや明らかであろう。「不在あるいは非在の対象」である全体社会を，全体

的一具体的な相の下で，私達の念頭に思いうかべるためである。逆にいえば，全体社会が「現前化」しうるのは，社会がイメージとして構成される限りにおいてである。想像力こそが，社会認識に探求の端緒を与えてくれる。いかにして私達は社会のイメージを構成しうるのか。それは，あるものを私達の意識とめざす対象の間に介在させ，<類同代理物>として機能させることによってである。このあるもの，即ち<アナログ>こそが社会学的想像力発動の原動力である。社会認識に探求の端緒を与える作用を，<アナログ>の第一機能とよぼう。この第一機能とは，全体社会の「現前化するもの」présentificateur[10] としての機能，と総括することができるだろう。

社会が具体的全体として立ち現われるのは全体社会が想像界の対象で甘んじている限りである。この条件は，社会認識が科学であろうとする限り，大きな代償といわざるをえない。想像的対象にとって現実とは，己れを形作る素材であって，己れの真偽を判定する基準ではない。イメージを支えているのは実在ではなく，私の信念である。イメージの真髄は，現実の複製たるイコンではなく私の抱く夢に求められよう。イメージと現実との齟齬がいくら指摘されたとしても，信憑性が動揺しない限り，それは「反証」にはならない。否およそイメージにとって「検証」という観念は無意味である。現実界では私の予測しえない出来事が常に出現し，私が裏切られることは避えない。もしも私の予見の網の目を逃れたり，私に抵抗したり，私の不意を衝く出来事が一切出現しないような世界が構成されるなら，私にとってこの世界の方が現実界よりずっと尤らしい。「芸術」における至上命令は，イメージを自己増殖させ，イメージを齟齬のないようつなぎ合せ現実よりもっと信憑性にとむ世界を現前させることであろう。こうした世界こそが想像界に他ならない。

これに対し科学の世界では，対象のイメージを思い浮べることは探求の出発点にすぎない。イメージが服従すべきは現実界の論理である。イメージは実在と照合され，その真偽を判定されなければいけない。イメージが科学の世界で語られる限り，それは検証されることを求めて現実界に還帰すべきものである。とはいえ想像界と現実界は根本的に異質なため，「イメージの検証」とは一種の形容矛盾的表現であり，その実行は困難をきわめる。イメージと現実の齟齬という検証作業上の発見を，イメージへフィードバックし，イメージの自己修正を図ることは果して可能であろうか。反証がイメージのごく一部に関わる場合，イメージは本来分化されない全体として与えられているので，部分修正は全体のもつ強靱な一体性に併呑され，イメージに何ら新しい相貌をもち来すことはできない。また反証が本質的部分に関する場合，その部分の修正はイメージの自己同一性を損い，別のものを産み落す。つまり想像的対象（イメージ）の修正の試みは「無効」であるか「根本的」であるかのいずれかを帰結する[11]。後者の場合，検証の成果は，旧来のイメージを捨て去り，全く新しいものを探し出すという「無限の退行」を現出せしめる。つまり「理解とはいつまでも果てしのつかぬ運動となり，

それはある像(イマージュ)に対するに別の像を以てし，更にその像に対するにまた別の像を以てする精神の連鎖反応となり，かくして無限に続くべき可能性を蔵する」[12]という帰結をもつ。

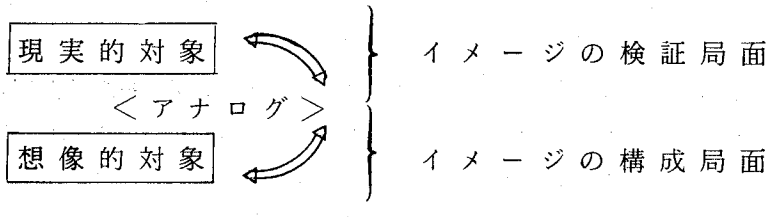
イメージの部分修正という形にしろ，全面廃棄という形にしろ，検証の成果を生かすことができないとすれば，検証作業をイメージ構成へとフィードバックする回路がすべて閉じられたことになる。結局のところ，ひとたび想像力に頼りはじめたなら，あとは実在との「神秘的合一」の奇跡を夢みながら，イメージの惰性的運動に身をまかせる以外に術はないのだろうか。このようなありさまで，社会学的想像力は，果して科学の「方法」といえるだろうか。イメージの構成で社会学的想像力の話を打切るわけにはいかない。

2—Ⅱ　イメージの検証

イメージには検証の成果を生かす途が存在しないようにみえる。科学の世界に住む限り検証を免かれることはできない。イメージの検証という形容矛盾的隘路をいかにしたら突破できるだろうか。突破の原動力は，ここでもまた＜アナログ＞によって与えられる。

イメージが実在に照応しないとき，直接イメージを修正しようとするから前節末尾でのべたような難問が生ずる。＜アナログ＞は，対象としてめざされる実在と同じ様に，現実界に存在するものである。この特性に注目してイメージ検証に関する考え方を変えてみたらどうか。検証の成果は，直接には＜アナログ＞の作り変えという形で生かされ，イメージの修正は＜アナログ＞の作り変えを仲立ちとして，間接的な形で実現されると考えてみたらどうだろうか。つまり現実からイメージへのフィードバックは，＜アナログ＞の組換えをはさんだ二段階回路を通じて作動するのである[13]。

図1　イメージの構成と検証



＜アナログ＞の組換えを仲立ちにイメージを現実に対応させるこうした手続きを，「イメージの検証」ということが許されるなら，イメージの構成の局面と検証の局面では，問題状況は百八十度転換することになる[14]。イメージの構成局面では，＜アナログ＞は，意識（想像的意識）とその定位対象である想像的対象の中間に位置している。＜アナログ＞，意識，定位対象の三者は一体となって想像的世界を形作る。このような「想像されたもの」の世界は現実界とは根本的に異質ではあるが，二つの世界は無関係あるいは没交渉ではありえない。

現実的実在は不在化あるいは非存在化――一言でいえば「空無化」されるべき存在という形で，常に想像的対象と関係づけられている。想像界とはいわば現実界を「地」として存立する「図」のごときものである。その限りで「想像界に属するものすべては『この世界の土台の上に』あらわれる」[15]。このような場合の＜アナログ＞とは，イメージの類同代理物のことに他ならず，その果すべき機能とは，「現前化」といった役どころである。

これに対して，イメージの検証の局面では四者の関係性は全く異ったものとなる。意識の定位対象は現実的対象であり，＜アナログ＞は意識と現実を媒介すべきものとして，その中間に位置する。イメージ（想像界）はどこに位置づけられるのか。前と同じ比喩を用いれば――その厳密な意味については後に立入って検討することにして――イメージは，意識，＜アナログ＞，定位対象という系列が「図」として存立するための「地」として機能する。今度は現実界が，イメージ（想像界）を土台として立ち現われるのである。この局面の＜アナログ＞に要求されるのは，イメージの類同代理物であり続けることではない。検証の成果を生かした絶えざる自己修正の結果，現実的対象の類同代理物になることが至上命令となる。

実在の類同代理物としての＜アナログ＞――このような存在は，科学の世界ではきわめて身近なものであろう。普通「モデル」という言葉で言い慣されているのが，これに相当するだろう。

「特性 ABD を含んでいるアナログ x は，被説明項 y が BC を含んでいるが A を含まず，また B が x と y との既知の相似性のすべてを表示している場合，アナログ x は被説明項 y のモデルである」[16]。

＜アナログ＞とは，現実的対象である被説明項を説明するための「モデル」に他ならない。イメージの検証を求めているうちに，今や直面するに至ったのは「科学的モデル」Scientific Models の問題領域である。ここで行論の必要上，モデルの本質について，アナロジーと関連する限りにおいて，手短かに論じておくことにしよう。

モデルとは何か。モデルとは，私達に未知の部分が多い第一次的領域（被説明項の属する領域）を科学的に征服するために，引照される第二次的領域のことである。第二次的領域について私達は（相対的にいって）よく組織化され一体となった知識をもっており，それ故，第二次領域は第一次領域よりも，私達にとってより既知で，問題性の少ない，より精通された存在である[17]。探求の対象である第一次領域を解明するために，何故にそれとは別の領域――モデルないし＜アナログ＞とよばれる――が必要なのか。それは，私達に新しい予測を行なうことを可能にする，換言すれば，何らかの「仮説」を手に入れることを可能にするからである。

「良いモデルとは，探求の第一次分野に関する新しい仮説や思弁を示唆してくれるような含意を豊富にもつモデルのことである」[18]。

仮説の産出こそが，科学の世界でモデルに期待される役割である。ここで＜アナログ＞の果すべき第二の機能が明らかになる。それは，現実的対象の類同代理物となることによって，私達に様々な仮説を思いつかせてくれる働きである。この第二の作用を，＜仮説産出＞機能とよぶことにしよう。

モデルとしてのアナログは，どうして仮説を産出する能力をもつのか，その能力を制約する条件は何だろうか。「仮説」とは，第二次領域（即ちモデルとしてのアナログ）についての言明を，一定の規則に従って，第一次領域に関する言明へと翻訳したものである。即ち，第二次領域から転用された術語をもって被説明項の領域を記述し直したものが仮説に他ならない[19]。モデルから推論するということは，既知化された領域（＜アナログ＞）に関する知識を，未知の領域に関する情報へといわば「アナロジカルに転用」analogical transfer する作業といえよう。文学ないし言語研究では，言葉のアナロジカルな転用・転義は「メタファー」（広義）とよばれるのが慣しである。それ故モデルとしてのアナログに由来する仮説・推論・予測・含意とは「被説明項の領域に関するメタフォリックな再記述」と規定することができるだろう[20]。

仮説が「メタフォリックな再記述」であるとすれば，モデルとしてのアナログが仮説を産出しうるための条件は，科学において「メタファー」が成立するための条件といい直すことができる。メタファーが成立するためには，転用されるべきオリジナルな語義が定まっていなければならない。科学的用語にオリジナルな意味を与えるのが，第二次領域に関する「科学的理論」である。ある領域が「モデルとしてのアナログ」として機能するには，当該領域に関する「よくまとまった科学的理論」well-knit scientific theory が予め存在していることが必須不可欠である。

「科学的理論」そのものは論理的構成物——公理—演繹系を典型とする——なので，イメージを固有の構成要素としていない。しかし，ある既存の理論体系に関連して，それが本来生成したのとは全く別の領域の現象を説明するためにも役立ちそうであると考えつくためには，イメージの力が必須不可欠である。ある領域が他の領域を解明するためのモデルあるいは＜アナログ＞となるべきであるという判断は，理論にいくら内在しても出てくるものではない。そこには発想の転換・論理の飛躍が必要である[21]。

「よくまとまった科学的理論」によって規定されたオリジナルな意味をもつ用語は，アナロジカルに転用されメタファーを作り出す。「主権とは，全身に生命と運動を与えるような人工の魂である」。こうした言明は，生理学理論という第二次領域に属する用語（魂）によって，主権という被説明項を含む第一次領域を再記述したものである。「主権とは魂である」というメタファーによって，たしかに主権に関する新しいパースペクリティブを切り拓くことができる。新しい意味を受胎するのは「主権」ばかりではない。「魂」もまた意味変容する。

即ち「魂とは有機体の主権である」という新しい見方が生成する。アナロジカルな転用によりメタファーに組みこまれた言葉は，いずれの領域においても新しい意味を蒙る。それはオリジナルな意味と異なるが決して無関係ではない。私達はメタファーを勝手気侭に作り出せない。オリジナルな語義の逸脱しうる範域は，2つの領域が各々内包している「観念と信条の連想関係の集合」[22] a set of associated ideas and beliefs によって限界づけられる。連想関係が豊饒なら産出されるメタファーも多彩である。豊かな連想に浸潤されている領域をモデルに選ぶなら，私達は大胆な仮説を続々と作り出すことができる。

この連想関係は何によって支えられているだろうか。これこそイメージである。オリジナルはイメージのなかで微妙な屈折を蒙ってはじめてメタファー＝仮説を作り上げる能力をもつ。オリジナルな意味が常同的なものなら，2つの領域は水と油のように対峙するだけで，メタファーという新しい綜合を経験しえないだろう。連想関係の力をかりてはじめてメタファーは無意味あるいは荒唐無稽な表現から脱することができる。仮説の質と量の双方を規制するのはイメージによって担保された連想関係の集合である。このような意味でイメージは，現実界が「図」として成立するための土台・土壌を形作る[23]。

モデルとしてのアナログの仮説産出能力は，1．よくまとまった科学的理論，2．連想関係という2つの項目を，どの位事前に制御できるかに依存する。2つの条件は，仮説構成というメタファーを用いた再記述を行うために，前者は用語の直示 denotation を，後者は共示 connotation を与えるものであるとも言えよう[24]。この2つの条件が満される限り，＜アナログ＞に関しその構成単位・関係・展相（ワーキング）を明確に知ることができる。それ故，この2つを＜分節化＞のための条件と一括することが許されよう。＜分節化＞が進めば進む程，私達は＜アナログ＞の1つの側面から他の側面へ自由に往来することができる，それ故，仮説産出という＜アナログ＞の果すべき第二の機能は飛躍的に向上する。

イメージは理論的な説明を行う際，モデルとしてのアナログの選定と転用という決定的局面できわめて重要な働きをする。イメージの検証局面で＜アナログ＞は，たしかに現実的対象の類同代理物になる必要がある。しかし対象との類同性が高い程，科学的に有用を仮説を産出しうる良質なアナログになる訳ではない[25]。良いアナログとは，対象とあらゆる側面で類似しているものではなく，ある「本質的な」一点で類似しているものである。何が本質的かは現実的関係をいくら詳細に調べたところで自動的に判断できはしない。その限りで，ある特定の実在を，ある特定の研究対象の＜アナログ＞と認定しうる根拠は，窮極的には[21]イメージのなかにあるといえよう。それ故モデリングの局面を，イメージの検証とよぶことが可能になるのである。

とはいえこの局面のイメージは，あくまでも「地」にすぎない。前述のようにモデルとしてのアナログとは，「言語のアナロジカルな用法」の一つの様式である。それ故「理論的モ

デルは，文字どうりに構成されるわけではない。その方法の核心は，あるやり方でものごとを語るところにある」[26]。ものごとを語る場合必須不可欠なのは「言葉」（広く「記号」）であってイメージではない。私達は，例えば「社会体系は AGIL という4つの機能要件をもつ」という言明を，何らイメージの力をかりずに理解しうる。「言葉はイメージではない」[27]。それ故「私達がモデルから自由に推論を引き出すことができるなら，モデルが絵として描き出されうること picturability は重要ではない」[28]。モデルとしてのアナログの本質は，目で見ることができるとか，想像することができるという点には存しない。それは，言葉によって組み立てられている，即ち「言語的実体」linguistic entities という性質に求められるだろう[22]。＜アナログ＞が「言語的実体」である限り，高度な分節性を身におびるので，高度な仮説産出能力を我がものにしうる。しかしその反面，＜アナログ＞が本来もっていたイメージとの緊密な連繋性が失われる。イメージは「言葉」に，あるいは「意味」にかつての地位を譲り渡す。

2—Ⅲ　＜アナログ＞の2機能の相剋性

科学の世界では，イメージもまた検証の要求から自由であることはできない。それ故，イメージはその本来の故郷である想像界を捨て，現実界へと旅立つ。想像界から現実界へ越境する際「言語的実体」であるモデルに身をまかせることによって，緊密な一体性を誇ったイメージにも，今や分節化の波がおしよせる。イメージの明晰化を求める余り，映像性に富んだ連想関係をどんどん切り捨てていけば，遂には，イメージの「対象を分化させない全体として意識させる」能力が失われる地点に立ち至るであろう。画像から言語へその存在基盤の一大変化は，科学のなかでイメージを語ろうとするとき，甘受するほかない犠牲であるといえよう。

こうして＜アナログ＞は，科学の世界で2つの機能をもつことになる。一つは探求の対象を全体的一具体的相の下に意識に与える，＜現前化＞の機能，もう一つは，探求の対象を理論的に説明することを私達に可能とする＜仮説産出＞の機能，以上の2つである。大切なのは，＜アナログ＞が2つの機能をもつことばかりではない。この2つの機能は，＜アナログ＞に矛盾し両立困難な要求を課す。この点も注目に値いする。高度な＜現前化＞機能をもつには，＜アナログ＞は細分化されえない全一体である必要がある。逆に＜仮説産出＞能力を高めるには，＜アナログ＞は十分に分節化される必要がある。＜アナログ＞は背反的な要請に直面するからといって，一方のみを尊しとして他方を切り捨てるわけにはいかない。求められているのは，両立困難な2つの要件の同時達成という課題である。一方の機能の極大化ではなく，2つの機能の最適化を可能にする＜アナログ＞が社会認識にとって最も望ましいものである。最適解を与えるような＜アナログ＞を見出すことができなければ，私達は，

自分の力で作り出す必要がある。

第3節　社会認識の諸類型

3－I　人体と機械

社会認識はアナロジーの論理を駆使して推進される。換言すれば，社会認識にとって＜アナログ＞を用いることがどうしても必要である。豊かな成果を収めることができるかどうかは，用いられる＜アナログ＞が適切かどうかに根底的に制約されている。＜アナログ＞は矛盾する2つの機能を同時に果さねばならない。2つの機能の最適解を与える＜アナログ＞を選ぶことが，社会認識に成功するための秘訣である。これまでの様々なタイプの社会認識は，用いられている＜アナログ＞に着目することによって，最も的確に整理することができるだろう。

現前化―機能を果すには，＜アナログ＞は緊密な一体性をもたなくてはならない。対象の全体性は，次の2つのやり方で私達に与えられる。一つは，目の当りに見るやり方であり，もう一つは，心のなかで感じとるやり方である。「全体」は，前者の場合，視覚的意味において実在し，後者の場合，感情的意味において実在する。＜アナログ＞のうち，その視覚的一体性を容易に看取しうるものを，＜視覚―アナグロ＞，感情的一体性を容易に感得しうるものを＜感情―アナログ＞となずけよう。視覚―アナログは，対象の視覚的構造（ゲシュタルト）を類同的に代理し，感情―アナログは，対象の感情的構造を類同的に代理する[29]。

さて社会認識で用いられる視覚―アナログにはどのようなものがあるだろうか。自然物のなかでは「人体」，人工物のなかでは「機械」――例えば近代初頭の時計のごとき――が好んで選ばれるものの典型である。人体―アナログを基盤に成立するのが「社会有機体説」，機械―アナログを成立基盤とするのが「社会機械論」である。人体は，機械と同じように私達にとって外在し，私達がその全貌をはっきりと見渡すことができるばかりでなく，その全体を私達は自らの身体を通じて感じとることさえできる。緊密な一体性を誇る点では機械は人体の敵ではない。それ故，人体アナログは，機械―アナログに比してずっと高い現前化能力をもつと推測されよう。人体―アナログがもつこの高度な現前化能力こそが，社会有機体説が社会機械論に先じて成立し，しかも現在でも死に絶えることのない強い影響力を享受している，その理由を解明する鍵を提供すると思われる。

他方，仮説産出能力の比較はどうなるのか。仮説産出能力は，1．よくまとまった科学的理論，2．連想関係という2つの項目からなる分節化の度合に制約されている[24]。まず科学的理論についていえば，生物学・生理学に先じて物理学が精緻化されたこともあって，（少なくとも20世紀中葉までは），人体―アナログは機械―アナログに対して遅れをとっている。

次に，連想関係についてみると，人体は全体が感得可能であるという感情―アナログの性質も合せもっているので，機械に対して一歩先んじている。

分節化の2つの項目に関して，人体―アナログと機械―アナログは1勝1敗の引分けのようにみえる。しかし，機械が人体にまさる決定的な点が一つある。それは，人体の内包する関係性が固定的なのに対し，機械のそれは，人間によって作り変えることが可能であるという点である。人体に関する科学的理論は，ある時点を限ってみれば，唯一とはいえないにしろその数はきわめて少ない。これに対し機械に関する理論は，問題になっている機械の種類を変えれば（例え時計からコンピューターへのように），そのレパートリーはかなり多い。それのみではない。＜アナログ＞の産出する社会認識に関する仮説が不適当な場合，機械ならもっと適切な仮説をもたらすよう組み換えることができる。人体を私達の都合で作り変えることは不可能である。以上の諸点から，仮説産出能力に関しては，機械―アナログは人体に先んじているといえる[30]。

＜アナログ＞の果すべき2つの機能に関して，人体と機械は対極的な位置にある。総合的にみると，両者の＜アナログ＞としての適切性はそう高いものとはいえない。視覚―アナログには2つの機能を最適化するものはないのか。ここに，人体と機械の長短を合い補うような折衷的なものが作り出される根拠がある。これを具現化したのが，「人工的人間」（ホッブズ），現代的にリファインすれば「サイバネティクス」等々の理論といえるだろう。こうした有機的機械論が，アナロジーによって社会認識にどれだけ豊かな成果をもたらしうるかについて，転用がはじまったばかりの現時点で実質的な予測を行なうことは困難である。それが＜アナログ＞としての形式的要件を満している点を指摘すれば，ここでは十分であろう。

3―Ⅲ　民族誌的小社会と歴史的小社会

さて次に，社会認識における感情―アナログにはどのようなものがあるかを考えてみよう。感情―アナログは，めざされる対象である全体社会と感情的に等価でなくてはならないが，そういうものといえば（全体社会を構成する）下位集団にとどめを刺すだろう。イエ，ムラ，クニ，カイシャといった集団は，私達に固有の感情を喚起する。独特の感情的負荷をおびた集団のうち，最も生き生きとその一体性を感じ取ることができるものが，全体社会の感情―アナログへと仕立上げられる[31]。

感情―アナログとなる集団は，認識者の属する文化圏から選ばれるか，あるいは異文化圏から選ばれるかのいずれかである。自文化圏からの選択は，認識者の「体験」に基づく。目を閉じれば，私達はその集団の息苦しいまでに緊密な一体性をまざまざと思いうかべることができる。自文化―アナログは，きわめて深刻な全体性体験に由来する，それ故，現前化能力はきわめて高い。その反面，自文化―アナログの喚起する感情は，体験に基づくので，

「生々しく」「ドロドロした」と言う以外には，言葉による分節化が不可能な場合がある。この場合，分節性に欠けるので，仮説産出能力はきわめて低い。こうした自文化―アナログにおける2つの機能のアンバランスを，グロテスクな形で具現化するのが，「自文化中心主義」Ethnocentrism ―― 日本における天皇制的「家族」主義，ドイツにおけるナチズム的「民族」主義――である[32]。

異文化圏から選び出された集団である異文化―アナログの場合，事態は全く逆である。その極限型である「異文化至上主義」Exoticismを念頭において考えてみよう。エグゾティシズムに陥いるのに異文化を体験する必要はない。フランスにいったことがないのに「巴里」を実感できるのは何故か。それは「知識」に由来する。読んだ本，聞いた話，見た映画等々から仕こんだ知識ゆえに，「巴里」は感情的に実在する。異文化―アナログは，本来言葉によって定式化されうる判断によって組み立てられたものだから，その属性・関係性・ワーキングを明晰化することは可能である。明晰化されたものが現実在（リアリティー）に合致しているという保障はない。大抵は，全体的文脈から切離された誇張――厳密には誤解といった方が適当なしろものだろう。異文化の理解の仕方の断片性，これが異国趣味（エクゾティシズム）の最大の特徴である。この断片性という性質は，＜アナログ＞としての機能の観点からはきわめて意義深い。断片的であるが故に，それがおかれている文脈は私達の想像にまかされている。文化的文脈は，翻訳された言葉の孕む連想関係をたよりに組み立てられる。現地の人々には思いもかけない文脈が夢想される。ほとんど連想関係に基づいて高度に分節化された異文化―アナログからは，文化の同一性により想像力を緊縛されている頭脳には到底思いもつかないような，きわめて大胆な仮説が引き出されることが多い。自文化に関する詳細で正確だが退屈な研究成果よりも，旅行者のもたらした異文化に関する不正確な片言隻語の方が，社会学的想像力を強く刺激し，結果として豊かな理論的成果を結実することが多いのも，異文化―アナログが高水準の仮説産出能力をもつからであろう[33]。

しかしその反面，断片的な知識から異文化の一体性を実感することはきわめて困難である。異文化―アナログの最大の弱点は，構造化の度合がきわめて脆弱であることに求められよう。それ故，現前化能力に乏しいのが通例である。特に異文化至上主義（エクゾティシズム）の場合，社会認識は自分が夢想する異文化社会との「落差」を手がかりにおし進められるので，分析対象の社会には属性ａｂｃ…が欠如しているという消極的言明に終始する。存在しないものによる特徴づけは，認識対象のもつ有機的一体性の破壊を帰結する。つまり零度の現前化能力が帰結されるのである。

自文化―アナログも異文化―アナログも，自文化中心主義あるいは異文化至上主義という両極に向って自己を純粋化するとき，蒙る帰結は同一である。現前化と仮説産出という2つの機能のうち一方のみが，他を犠牲にして極大化されるのである。極大化される機能は全く

対極的であるが，最適ではないという点で両者は全く同一である[34]。豊かな社会認識を結実しうる最適アナログは，両極ではなく中間の方に存在する。

異文化―アナログに不足している現前化能力は，もしも異文化のもつ一体性が実感されうるなら，飛躍的に増大するであろう。ここに人類学的「野外調査（フィールドワーク）」が行われる根拠がある。人類学的フィールドワークでは，空間的にも人口的にも一人の調査者が全体を十分に掌握できるような小社会が調査対象に選ばれる。調査者は，この小社会に長期間にわたり実際に生活し，文化項目のすべてにわたりその社会的文脈が明らかになるように多面的・集中的な「事例研究」を行なう。その際，現地語の修得，長期間にわたる生活の共同を基礎し，「事例」を「内側から」理解する「参与観察」が用いられるのが通例である。集中的で参与的な現地調査のなかで，異文化は知識の水準から体験の水準へと下降する。異文化体験を言語によって分節化したものが「民族誌」であるといえよう。

私達はすぐれた民族誌を読むとき，対象社会の緊密な一体性を実感することができる。民族誌的な記述のなかから浮び上ってくる社会は，風変りでもの珍しい風習のモザイクではなく，行動・価値・制度・慣習などのあらゆる要素が相互に連関し合う生きた全体である。民族誌のなかの小社会を＜アナログ＞として用いるなら，現前化の機能は十分に果される。即ち民族誌的小社会は，異文化―アナログに欠如しがちな現前化能力の現地調査による補填により，２つの機能は最適化され，社会認識のための最良の＜アナログ＞としての資格を獲得する。異文化―アナログを用いて現代社会を解読しようと試みる「人類学的想像力」とでもよばれうるタイプの社会認識は，良質の民族誌的業績の蓄積を背景に20世紀に入ると語の厳密なる意味で実行可能となる[35]。

他方，自文化が明確に「反省」の対象となり，体験ばかりでなく知識という形で私達に与えられるなら，自文化―アナログに欠けがちな仮説産出能力を補填することが可能になるだろう。自文化に属する集団が，言葉によって十分に分節化された反省的知識の体系として現出するには，その集団は認識者にとってある距りをもつことが必要であろう。この距りは通常歴史的遡行によって与えられる。私達は歴史的パースペクティブをもつことにより，文化の同一性に由来する自明の世界を打破ることができる。良質な歴史学的業績の蓄積のおかげで，そのディテールと全体像の双方に関して過不足なく知悉している歴史上の社会が存在する場合，それは，２つの機能の最適化を達成した社会認識のための良質な＜アナログ＞となる資格をもつ。事実，歴史的小社会を引照しつつ現代の特性把握を試みる，歴史社会学的な社会認識のタイプは，「人類学的想像力」よりずっと長い歴史をもつ[36]。

歴史的パースペクティブによって同文化―アナログに与えられる仮説産出能力は，連想の発動に依然として同一文化性という箍がはめられているので，奔放さに欠けるうらみはあるが，その反面，全体的文脈を大きく読みまちがえることはまずありえないので，手堅さの点

では優れている。その限りで「よくまとまった科学的理論」に由来する仮説産出能力に近似している。しかしこの場合，「理論」といっても，「歴史的個体」の個性記述に関わるものだから，認識者の問題関心に相関した理論体系なので，ある一定の時点をとっても，同一水準のものが複数並立しているのが原則である。それ故歴史的社会―アナログは，人体や機械よりもすぐれた仮説産出能力をもつと推測される。

3―Ⅲ　社会認識とアナロジー

社会認識におけるアナロジーといった場合，社会有機体説や社会機械論が直ちに念頭にうかぶものであろう。今までの議論でわかるのは人体と機械は，視覚―アナログの典型にすぎないということである。社会認識には今一つ感情―アナログという大きな領野があることを忘れてはならない。視覚―アナログと感情―アナログとでは，全体の与えられ方が異なるばかりでなく，分節化のされ方も大きくことなる。この点を最後に確認しておこう。

感情は視覚に比べて本来分節化することがきわめてむずかしい。人間の感覚のうちで視覚こそ最も明晰なるが故に，ルネッサンス以降偏愛されたものである。ルネッサンス的遠近法に象徴されるように，視覚と科学的精神とは不即不離の関係にある。視覚―アナログの典型である人体と機械が，生物系と物理系という自然科学の2大分野からの転用であることからも，このことは明らかであろう。視覚―アナログは本来，判明・明晰なものである。これに対し感情―アナログは，本来，曖昧で多義的である。このことから，感情―アナログの仮説産出能力の絶対的低位性を推論してはならない。

感情―アナログには一つのすぐれた利点がある。それは言語との親和性である。ある感情が私達のなかで，一定の構造をもったものとして定着するのは言葉の力のおかげである。言葉のラベルをはりつけられることによって，感情は移ろいやすいものから永続的なものに変化する。感情を記憶のなかに沈澱させたり憶い出として取り出したり，あるいは2つの感情を類似したものと判定したりする作業は，すべて言葉を手がかりに行われる。ある対象が類似の感情を喚起しうるのは，その対象を所記とする言葉の情動的価値の力による。私達は，対象ではなく言葉に感情的に反応する。私達は実際の家庭生活の煩わしさに困憊していても「家族」という言葉から「感情的融合」や「全人格的信頼」といううるわしい感情をつむぎ出すことができる。＜アナログ＞になりうる感情とは生の感情ではなく，言葉によって表現されうる感情である。感情―アナログの本質的特徴は「言語的実体」であることに求められよう。

人体あるいは機械といった視覚―アナログの場合，仮説産出の基礎となる「理論」は自然科学的な理論である。大抵は数理的に定式化され厳密な相貌をもつ。他方感情―アナログの場合は，自然言語の体系である。自然言語は，人工言語である数学に比べて曖昧だから仮説産出能力で劣るわけではない。仮説産出の条件は「分節性」である。自然言語は数理化とは

異っているが，同等の権利をもつ分節化の方式である。否，連想性を考慮するとどちらがすぐれた分節化であるかは即断を許さない。たしかに自然科学は厳密である。厳密なものは転義・転用されても，依然として本来の厳密性を保っているわけではない。社会認識の科学性は，あくまでもアナロジカルな転用の成果に関わるものである。自然科学における数理的理論も，「言語的実体」という新しい性質を分有しない限り，社会認識において転用されることは不可能である。追求されるべきはアナロジーとしての厳密性である。

〔注〕

1) C. W. Mills, The Sociological Imagination, 1959, Oxford Uni. Pr. p. 165
(鈴木広訳，『社会学的想像力』1965年，紀伊国屋書店，p.217)。

2) P. L. Berger Invitation to Sociology, 1963, Doubleday & Company Inc.
(水野節夫・村山研一訳，『社会学への招待』1979年，思索社，p.30—31)。

3) "Social Sciences" と "Moral Sciences" との用語法上の関連については，P. R. Senn "The Earliest Use of the Term: Social Sciences", Journal of the History of Ideas, 19 (1958) pp. 568—570, 参照。特に Hobbes に即して，moral philosophy と「政治学」の形成との関連を論じたものとして，福田歓一『近代政治原理成立史序説』1971年，岩波書店，またスミスに即して，Moral Philosophy と「経済学」の形成との関連を論じたものとして，例えば高島善哉『アダム・スミスの市民社会体系』1969年，岩波書店，を参照。

4) モラルを中核に全体社会一認識と人間一認識を表裏一体化するという考え方は，多分アリストテレスによって最も早く，最も完成された形で彫琢されたといえるであろう。彼によれば，政治学と倫理学は，人間の幸福を促進し維持するという実践的目的に志向した単一の探求分野である。2つの主題をもつ社会認識という考え方の原型はアリストテレスによって定礎された。このことのもつ社会学史にとっての意義については稿を改めて論じたい。

5) W. C. Mills, op. cit. p. 15 (鈴木訳，p.20)。

6) 最近に至ると，原子そのものも観察可能になるが，そうなると原子は，再び「素粒子」へと分割され，ロジックそのものには変わりがない。とはいえ現代の物理学では「分割したり」「……から成り立っている」という考え方そのものに対する根強い批判がある。原子論の自然認識と社会認識における対比は，本文における程単純なものではないのは無論である。自然認識の原子論としてここで念頭におかれているのは，「物理学」ではなく，デモクリトスなどの「自然哲学」である。問題点の所在を明確にするための議論である。

7) J. P. Sartre, L'IMAGINAIRE, 1940,
(平井啓之訳『想像力の問題』1955，人文書院，p.75)。

8) 参照，菅野盾樹「想像力— Sur la recherche Sartrienne」『年報人間科学』第2号，大阪大学人間科学部，1981，pp. 172—3，177—8。

9) J. P. Sartre, op. cit. (平井訳，p.170)

10) Ibid., p. 137. (平井訳，p.183)

11) Ibid., (平井訳，p.183)。

12) Ibid. (平井訳，p.158)

13) 例えば肖像画をアナログに歴史上の人物を想像する場合を考えてみよう。他の史料からその人物が肖像画を仲立ちに構成されたイメージと異なり眼鏡をかけていたことを新に知る。ところが眼鏡をかけた姿を一気に想像することは，「文弱」というイメージにわざわいされ不可能である。この場合でも，肖像画を眼鏡をかけた姿に入念に作り変え，それを媒介に，より実在に近い人物像を構成することは可能であろう。イメージはアナログの修正を通して構成され直されている。

14) 問題状況を対比的に描いておけば，

① イメージ構成の局面

$$\underbrace{\text{想像的対象—アナログ—想像的意識}}_{\text{「図」としての想像界}}$$

↕

「地」としての現実界

② イメージ検証の局面

現実的対象—アナログ—類比的意識

「図」としての現実界

↕

「地」としての想像界

15) Sartre, op. cit. (平井訳, 262頁)

16) Mary B. Hesse, Models and Analogies in Science, 1966, University of Notre Dame Press, p. 101. M. Hesse 従えば, Model とは Analogue のことに他ならない (Ibid, p. 7)。Max Black はモデルの様々な類型分けという視点から議論をしているが, 結論は同じである。「『記述モデル』とオリジナルな領域との関連は, アナログモデルとそのオリジナルとの関連に類似している」。M. Black, Models and Metaphors, 1962, Cornell Uni. p. 230。科学的探求にはモデルが必要なこと, モデルと対象との関係性の本質は同一性ではなく類似性 (同一性＋相違性) にあることなど, 基礎的論点に疑問のある方は Hesse あるいは Black の書物を参照して頂きたい。本文では, モデルとアナグロを同義に用いることが許される地点から議論は出発している。

17) cf, Black, ibid., pp. 230-1, Hesse, ibid., pp. 158-9.

18) Black, ibid., p. 237, cf, Hesse, ibid., p. 8.

19) Hesse, ibid., p. 176, cf, Black, ibid., p. 230.

20) Black, ibid., p. 238, Hesse, ibid., p. 157.

21) モデルの選定がイメージによってのみ決定される訳ではない。「明確な解答は不可能にしても」, そこには現実的条件も共働している。この点に関する抑制のきいた議論としては, Hesse, op. cit., pp. 90-92 を参照。

22) Hesse, op. cit., p. 159.

23) 以上で抽象的で述べたことを, T. Hobbes を用いて例解しておこう。社会とは「人間の技術によって, 自然のうちで理性的で最もすぐれた作品, すなわち人間が模倣されたものである」という大前提によって, 社会のアナログとして人体が選択される (モデルの選定)。次に「主権は魂」「長官や役人は関節」……といった生理学上の用語と社会現象とを対応させる。「国王は魂である」と言うことが可能なことからも窺えるように, この「対応の規則」correspondence rule の設定にはイメージが関与している。この論点は, 本文では言及する余裕がなかった。(参照, Hesse, p. 174-5)。社会にアナロジーされた「人間」は意味変容している。それは「人工的人間」とよばれるのがふさわしい。人工的人間は人間の姿をしているが人間ではない。それは怪物といえるかもしれない。ここでホッブズは畢生の飛躍をする。社会とはリヴァイアサンである! (連想の局面)。「人工的人間」で「リヴァイアサン」を連想しうるのは, 旧約聖書を知らずしては不可能である。リヴァイアサンに至りつくことによって, ホッブズの用いたアナグロは「言語的実体」となる。

24) 仮説は比喩であるので, 直喩 Simile/隠喩 Metaphor という伝統的区分を用いれば, 2つの条件は次のように言いかえることができよう。仮説産出能力が主として科学的理論に依存している場合を直喩—アナログ, 主として連想関係に依拠している場合を隠喩—アナログと名づけることが可能かもしれない。

25) cf, Hesse, op. cit., p. 77.

26) Black, op. cit., p. 229.

27) Sartre, op. cit. (平井訳, 115頁)

28) Black, op. cit., p. 229; Hesse, op. cit., p. 19.

29) 本文では実際に用いられているアナログに即して議論されているが, アナログの諸類型は論理的に導出することも可能である。①全体の与えられ方；視覚/感情, ②分節化の基盤；直喩/隠喩(注24)を組み合わせると次の4類型をうる。但しコラムの内は例示。

分節化 / 現前化	直喩—アナログ	隠喩—アナログ
視覚—アナログ	機　械	人　体
感情—アナログ	自文化集団	異文化集団

30) このような推論は次のような事実によって傍証されるだろう。今, イデオロギー的立場を保守主義

/自由主義/急進主義に3分してみると，社会有機体説が親和するのは保守主義のみであるが，社会機械論は3つの立場と結びつく可能性をもつ。機械一アナログは，様々な理論体系を産み出す屈伸性・柔軟性をもつ。それ故社会機械論のイデオロギー的立場性は多彩なのであろう。

31) 日本の社会学に経験科学的傾向を確立した学者の一人である戸田貞三を例に感情一アナログとは何かについて考えてみよう。彼は，一方では家族に関し成員相互の感情的融合・人格的合一化という集団としての特質に着目した漸新な定義を下し，他方ではこうした家族の現実的構成を，特に第1回国勢調査の 1/1000 抽出写しの利用という経験科学的手法を駆使して解明した。こうした戸田について次のような思い出が語られている。「もう一つ，私たちが飽きるほど聞いたのは，この科学的方法によって明らかにされた家族の心理学的基礎に関する美しい言葉である。夫婦や親子の間の感情的融合および全人格的信頼……こうした点に触れる時，教壇の先生は必ず眼を半ば閉じて，恍惚と呼びたいような表情になる。……」（清水幾太郎「思想の言葉」『思想』№587，（1973年5月号）。戸田にとっては「家族」は感情的に実在している。彼は「眼を半ば閉じ」ることによってその全体性を実感しうる。彼の家族に対する感情は「美しい言葉」によって語り出される。集団の感情的構造と言葉との親和性がここに注目されるべきである。感情的構造は言葉によって分節化され，定義という明晰な表現に到達しうる。強い感情はユニークな定義をうむ。一たび明晰な定義に達すれば科学的手法と十分結びつきうる。感情→言語→科学性という系列が存在しうる。感情一アナログは視覚一アナログに比して非科学的であると即断する根拠はない（Ⅲ－3参照）。

32) 現前化された全体を「国体」と名づけたところで，「国体の本義」はその蜃気楼のような特質にあることには変らない。「血と地」「ゲルマン民族」という名辞も，個人をこえるものが存在することを象徴する以外は無限定である。

33) Ronald L. Meek によれば，西欧の社会認識の18世紀における偉大な飛躍は，インディアンに関する当時では最新の情報から引き出された「世界ははじめアメリカのような状態にあった」という（現代からみれば全くの）臆断をスプリングボードとして実現されたという。参照 R.L. Meek, Social Science and the Ignoble Savage, 1976, Cambridge Uni. Pr. 及び J.H. Elliott, The Old World and the New; 1492-1650, 1970, Cambridge Uni. Pr.（越智武臣・川北稔訳『旧世界と新世界』1975，岩波書店）も参照。

34) 日本の社会科学が「輸入的」「翻訳的」「西欧コンプレックス的」であると断定し，「自前の」「土着の」「民衆に密着した」理論を作ろうとする動きが周期的に出現するが，結果として社会科学一般に対する不信感しかもたらしえないのはこのような理由による。self-made は科学の世界では（倫理の領域ではいざしらず）それ自体何の意味もない。

35) 「人類学的想像力」によって社会認識を行なったものの先駆けは Malinowski であろう。彼の用いたアナログは「トロブリアンド諸島」である。「トロブリアンド諸島の調査こそ，彼の労作の大部分の源であって，マリノフスキーは，どのような理論を展開するばあいにも，つねにその結論は，彼がこの島で得たイメージにもどっていくのである」。（泉靖一，『マリノフスキー・レヴィストロース』〔世界の名著，59〕，1967年，中央公論社，13頁）。

36) 西欧の社会認識における歴史社会アナログの典型は「都市」（端的にポリス）であろう。ポリスは小社会であるにもかかわらず，それに関する研究の蓄積は厖大である。「都市」をアナログとする社会認識は，私見によれば，「市民社会論」とよばれるのにふさわしい。この点については稿を改めて論じたい。（但し，厳密にいえばポリスは西欧人にとって同文化であると同時に異文化でもある）

STRUCTURE and FUNCTION of SOCIOLOGICAL IMAGINATION

Yosuke KOHTOH

When we begin to make scientific researches into a society, why is the Sociological Imagination needed?

All classic social scientists have been concerned not only with the salient characteristics of their time, or the structure and historical trend of a society as a whole, but also with the character of human nature, or wishes and motives of various individuals living in the society. In the classic tradition of western social thought it is easy to find out the complementarity between knowing society as a whole and understanding individuals in the concrete

If sociologists don't want to abandon this classic tradition, they should always seek to attain these dual goals at once. Therefore the sociological imagination becomes needed. C. W. Mills explained this noint clearly. The sociological imagination

> "is a quality of mind that seems most dramatically to promise an understanding of the intimate realities of ourselves in connection with larger social realities" (The Sociological Imagination, p. 15).

Owing to Mills we can recognize very clearly the promise of the sociological imagination. But there remains an important problem. How can this promise come to be realized at all?

It is not in arts but in sciences that the sociological imagination must play a great part. In this connection we face with difficult problems. Scientific method can be mastered in principle by everyone, only if he wants it. The sociological imagination should be regarded as a normal process of scientific discovery rather than a virtuosity which only a man of genius can enjoy. Concerning the imagination, we have never sufficiently made clear its formal procedure. The main aim of this paper is to formulate the typical proceeding of activating and transforming the imagination in social sciences.

There has been a very close connection between imagination and analogy in the history of social thought. I may call "analogue" what is treated to be analogous to a society. This analogue, with which which sociologists analogize a society as a whole, seems to have two functions.

One is the presentation-function. Owing to this function the total society is able to become vivid and intimate to us as if we see it before our very eyes, though it is in fact invisible, remote and abstract. Having resort to the present-

ation-function of analogue, sociologists can give a full picture of a society as a whole. What is made present by the medium of analogue is different between in sciences and in arts. In the former it is only a reality in a real world, but in the latter fictitious person and thing are permitted to be present.

When we construct what is called models, we cannot help depending upon analogues. Analogue is the source of models. It has also the model building-function. As usual, several models can be derived from one analogue, and the capacity which enables us to inspire with models is different among them. Only if something is analogous to an object of study, we may call it analogue, but models are supposed to have the same formal structure as it. Analogues used in arts are not necessary to be isomorphic. Analogues should be transformed into models, as far as they concern with sciences.

Though we are used to mean only the presentation-function by the term Imagination, every analogue has always two functions. But it is perhaps more important for social scientists to realize clearly that two are antinomic.

From where do we get analogues? They are concrete objects or knowledge about realities. Furthermore they are only in objective terms observable or also in subjective terms understood. If we cross these two axes, we get four types. Organism, artefact, small historical group and small group in ethnography are representative of each.

In respect of presentation-function, analogue derived from our experiences are more excellent than that derived from our knowledges. But in respect of model building-function, the latter is superior to the former.

It is very difficult for analogue to optimize these antinomic two. Only very few really can make a contribution to a scientific study of society. Indeed in the history of sociological thought up to now very small number of analogues have been made use of repeatedly. Because of this little variation there appears the tradition. If we can discern which analogue is used, it is easy to reduce various social thoughts to some fundamental types and to recognize their nature and development clearer. It is "analogue" that constiutes the infrastructure of social thoughts and theories.